

『明実録』の琉球史料

目次

	はじめに	1
	凡例	4
	参考文献	6
原文篇	太祖実録 洪武四年(一三七一)―洪武三十一年(一三九八)	11
	太宗実録 洪武三十五年(一四〇二)―永楽二十二年(一四二四)	18
	仁宗実録 永楽二十二年(一四二四)―洪熙元年(一四二五)	25
	宣宗実録 洪熙元年(一四二五)―宣徳九年(一四三四)	26
訳文篇	太祖実録	35
	太宗実録	44
	仁宗実録	53
	宣宗実録	54
注釈篇	太祖実録	63
	太宗実録	87
	仁宗実録	99
	宣宗実録	101

## 『明実録』の琉球史料

和田久徳・池谷望子

内田晶子・高瀬恭子

はじめに

明朝（一三六八—一六四四年）は建国後まもなく周辺諸国に招撫の使者を送り、その一環として現在の沖縄に対しても使を遣わした。これに応じて朝貢していったこの地域の首長たちは、明によって琉球国中山王・琉球国山南王・琉球国山北王に冊封された。その後琉球国は急速な発展をとげ、やがて統一国家を形成し、明との緊密な関係を維持しつつ、東アジア・東南アジアにおいて活発な中継貿易活動を展開し、独自の社会・文化を発達させた。

しかしこの時期の琉球国の様相を明らかにするための史料は極めて乏しい。一方、明には『明実録』という精細な記録がある。『明実録』は正式には『大明実録』といい、『皇明実録』とも称する。全二九〇九巻。永楽九年（一四一一）に成った胡広等編『太祖実録』二五七巻から、温体仁等編『熹宗実録』八

四巻まで、明朝十三代皇帝の実録である。実録は各皇帝の没後に、起居注（皇帝の起居を記録する日記体の官撰文書）や各官府の文書に基づいて編修された。内容は皇帝の事蹟を中心としてその治世における政治的・経済的・社会的諸事象全般に及んでおり、明代史の根本史料である。周辺諸国・諸民族についても、全代を通じ一貫して組織的に記録されている。

僅かの碑文などを除けば、その国に固有の同時代史料がないような場合、『明実録』の記事は貴重である。例えば初期のアユタヤ朝タイやマラッカ王国などの歴史説明に『明実録』が貢献するところは大きい。その国独自の記録の残る時期に関しても、『明実録』の記述との比較対照は有益である。

琉球の場合もこの事情は同じである。『明実録』がほとんど唯一の史料である明初の五十年間においては勿論のこと、その後の『歴代宝案』という第一級史料を持つ時期においても、『明実録』は必見すべき史料である。

それにもかかわらず、一九六〇年代までの琉球中世史研究において、『明実録』の史料的価値の認識は必ずしも十分ではなかった。また史料として注目した場合においても、『明実録』が大部の書であり、その中に含まれる琉球史料を検出するのが容易でないことから、その利用は部分的なものにとどまっていた。

そのような情勢の中で発表されたのが、和田久徳「明実録の沖繩史料」であった。これは台北の中央研究院歴史語言研究所によって影印公刊された『国立北平図書館蔵紅格明実録鈔本』から琉球関係記事を抄出し、同本付録の『明実録校勘記』による校訂と、和田自身による訂正とを加えたもので、「明実録の沖繩史料(一)」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』二四、一九七一年）、「明実録の沖繩史料(二)」（『南島史学』創刊号、一九七二年）として発表され、『明実録』中の琉球史料の利用を一挙に容易にした。

その序文では、『明実録』の史料的性格を明らかにすると共に、『明史叢琉球伝』『明史琉球伝』『大明一統志』ほか、琉球に関するまとまった記述を持つ数多の中国史籍や、陳侃以下明代冊封使の『使琉球録』をあげて、具体的にそれぞれの特色や『明実録』との関わりが紹介されている。『明実録』は宮廷の秘籍であり、普通は直接に利用できなかった。『中山沿革志』（汪楫撰、康熙二十三年自序）は『明実録』から記事を摘録し

ているが、それは汪楫が『明史』編纂にたずさわり、『明実録』を披見しえたからである。そのため『中山沿革志』は、琉球で成った代表的な史書である『蔡温本中山世譜』や、近代以前において琉球に関する著述の白眉とされて流布した『中山伝信録』の主要な材料となった。しかし『中山沿革志』は『明実録』の琉球関係記事の全部は採っておらず、また採った際に記述を省略したために誤りを生じている場合のあることが、紹介されている。そしてこれら諸書の本来の源泉である『明実録』そのものに遡って直接あたることの必要性が述べられている。

このたび「明実録の沖繩史料(一)」「(二)」及び「明実録の沖繩史料補正」（『歴代宝案研究』三・四合併号、一九九三年）について、原文を一本にまとめ、訳注をほどこすこととした。発表以来三十年近くを経て原論文が既に入手し難くなっていること、「補正」を含めれば、掲載が三誌にわたっていることの不便を解消し、訳注によって『明実録』がより利用し易くなるよう願うてのことである。

訳注にあたっては、『明実録』の記事と比較参照しうる琉球側の同時代記録である『歴代宝案』との対照を重要課題の一つとした。『明実録』と『歴代宝案』は相い補うべき関係にあり、両者を併せ見ることによって事実の経過やその持つ意味がよくわかるからである。

これに対し、『中山世鑑』ほかの琉球側史書は、琉球独自の伝承部分を除いては注に利用することは少なかつた。琉球の史書の成立はすべて清代に入ってからのものであり、とりわけ『蔡温本中山世譜』は前述したように『明実録』が史料源であると考えられるからである。

和田久徳教授は平成十一年三月九日、逝去された。私共の訳注はもとより不備ではあるが、教授の遺志の一端を継ぐことができれば幸いである。

(高瀬記)

## 凡例

### 原文篇

一、本篇は台北の中央研究院歴史語言研究所によって影印公刊された『国立北平図書館蔵紅格明実録鈔本』について、太祖から宣宗までの実録のうち、琉球に関する記事を抄出し編纂したものである。

一、編次は各朝実録によって年代順にし、抄出した記事には、各朝ごとに頭番号を付した。各実録に存する巻数は記さずに省いた。

一、抄録にあたっては原本の体裁内容を存することを原則としたが、下記の改変を行なった。

① 明らかな誤字・脱字・衍字の類は、影印本付録の「明実録校勘記」によって訂正した。訂正した字句には、その右傍に○印を付した。「明実録校勘記」に記載のない場合でも、訂すべきと考えられる字句には、右傍の（ ）内にその意を注記した。

② 異体字・俗字・略字の多くは、正字あるいは通用の字体に改めた。誤解のおそれがない場合は、印刷の便宜上、原本

の正字などにかえて略字体を使用したこともある。また同義の字は通用の字体に統一した場合がある。

(例 侄↓姪、鞞↓靴、裡↓裏、襪↓鞵)

③ 敬避のための空格の類は、これをやめて普通の記載とした。

④ 採録した記事の中で、琉球と直接には関係のない内容の部分は、これを省略した場合がある。省略した部分は点線符号で示した。

⑤ 記事の係わる年月・干支について、初出の年次の下の（ ）内に西暦年数を示し、干支の下の（ ）内には当該月の日数を示した。ただし同一年次であってもその年末などにおいて西暦が変る場合があるが、それについてはふれず、一律に示している。

⑥ 各記事には句読点を施した。

### 訳文篇

訳文は次の通りとした。

① いわゆる読み下し文とする。

② 現代仮名遣いを用いる。

③ 原文の漢字はなるべく残す。

④ 異体字・俗字などは原則として正字(常用漢字を含む)あ

- るいは通用の字体に改め、同義の字は通用の字体に統一したことがある（例 賁・賁↓齋、敕・勅↓勅、舡↓船）。
- ⑤ 明らかな誤用は注記せずに正しい字に改めた場合がある（例 瓜哇↓爪哇）。

## 注 釈 篇

注釈は次の通りとした。

- ① 各朝実録ごとに注番号を付す。
- ② 同一語・同一事項は注として再記しない。
- ③ 訳注全般に参照した辞書・文献は以下の通りである。これらについては個別に出典を注記しない。ただし必要な場合には（ ）内に示した略称によって注記する。なお個々に参照した研究書・論文等については当該の個所に記すにとどめる。

参考文献

( ) 内は略称

- 諸橋轍次著「大漢和辞典」 大修館書店 一九八四年修訂版  
中文大辞典編纂委員会編「中文大辞典」 台北 中国文化大学  
出版部 一九七三年  
漢語大詞典編輯委員會漢語大詞典編纂処編「漢語大詞典」 漢  
語大詞典出版社 一九八五—一九八四年  
愛知大学中日大辞典編纂処編「中日大辞典」 大修館書店  
一九八六年増訂版  
「アジア歴史事典」 平凡社 一九五九—一九六二年  
「沖繩大百科事典」 沖繩タイムス社 一九八三年(「大百科」)  
譚其驥主編「中国歴史地図集 第七冊 元・明時期」 上海  
地図出版社 一九八二年  
「福建省地図冊」 福建省地図出版社 一九九〇年  
臧励穌等編「中国古今地名大辞典」 商務印書館 一九三二年  
青山定雄著「読史方輿紀要索引中国歴代地名要覧」 一九三三  
年 省心書房影印本 一九七四年  
国立中央図書館編「明人傳記資料索引」 台北 文史哲出版社  
一九六五—一九六六年(「明人伝記」)  
田継綜編「八十九種明代伝記綜合引得」 一九三五年 北京

中華書局本 一九八七年

「歴代宝案 校訂本」第一・二冊 沖縄県教育委員会 一九九

二年(「宝案」)。なお「明実録」と関連する記事はすべて第

一集にあるので、引用にあたっては第一集を省略し、例えば

一卷一号文書の場合は「〇一〇一」とする。

「歴代宝案 訳注本」第一・二冊 沖縄県教育委員会 一九九

四年、九七年(「宝案 訳注本」)

李東陽等修「大明会典」 正徳四年(一五〇九) 刊 汲古書院

影印本 一九八九年(「正徳会典」)

申時行等修「大明会典」 万曆十五年(一五八七) 刊 北京

中華書局活字本 一九八八年(「万曆会典」)

張廷玉等撰「明史」 北京 中華書局標点本 一九七四年

和田清編「明史食貨志譯註」 東洋文庫 一九五七年

陳侃「使琉球録」 嘉靖十三年(一五三四) 自序 国立北平図

書館善本叢書第一集 嘉靖間原刊本影印

郭汝霖「使琉球録」 嘉靖四十年(一五六二) 自序 アメリカ

議会図書館蔵本

蕭崇業「使琉球録」 万曆七年(一五七九) 自序 台湾 学生

書局 一九六九年

夏子陽「使琉球録」 万曆三十四年(一六〇六) 自序 台湾

学生書局 一九六九年

胡靖「杜天使冊封琉球真記奇観」 崇禎年間 「那覇市史 資

料篇第一卷三 冊封使錄關係資料」一九七七年

汪楫『中山沿革志』康熙二十三年（一六八四）自序（東洋文

庫藏「勅撰奉使錄」所収）

林嫌等纂修『福州府志』萬曆二十四年（一五九六）北京

書目文獻出版社 日本藏中國罕見地方志叢刊 一九九〇年

（『萬曆福州府志』）

謝道承等纂修『福建通志』乾隆二年（一七三七）江蘇広陵

古籍刻印本 一九八九年（『乾隆福建通志』）

魯曾煜等纂修『福州府志』乾隆十九年（一七五四）台北

成文出版社 中國方志叢書七二號 一九六七年（『乾隆福州

府志』）

陳寿祺等纂修『福建通志』同治十年（一八七二）台北 華

文書局 中國省志彙編之九 一九六八年（『同治福建通志』）

趙汝适『諸蕃志』寶慶元年（一二二五）自序（馮承鈞『諸蕃志

校注』一九四〇年、台灣 商務印書館 一九七〇年）

汪大淵『島夷誌略』至正九年（一三四九）撰（蘇繼頤『島夷誌

略校釈』北京 中華書局 一九八一年）

陳誠『西域行程記』『西域番國志』永樂十三年（一四一五）頃

（周連寬校注『西域行程記』『西域番國志』北京 中華書局

一九九一年）

馬歡『瀛涯勝覽』永樂十四年（一四一六）自序 景泰二年（一

四五二）加筆（馮承鈞『瀛涯勝覽校注』一九三五年、北京

中華書局 一九五五年）

鞏珍『西洋番國志』宣德九年（一四三四）自序（向達校注『西

洋番國志』北京 中華書局 一九六一年）

費信『星槎勝覽』正統元年（一四三六）自序（馮承鈞『星槎勝

覽校注』一九三八年、北京 中華書局 一九五四年）

李賢等撰『大明一統志』天順五年（一四六一）刊（西安 三秦

出版社 司禮監官刻初印本影印 一九九〇年）

黃省曾『西洋朝貢典錄』正德十五年（一五二〇）自序（謝方校

注『西洋朝貢典錄』北京 中華書局 一九八二年）

黃衷『海語』嘉靖十五年（一五三六）自序（台灣 學生書局

嶺南遺書本影印 一九七五年）

嚴從簡『殊域周咨錄』萬曆二年（一五七四）自序（余思黎点校

『殊域周咨錄』北京 中華書局 一九九三年）

羅曰駟『咸賓錄』萬曆十九年（一五九二）序

張燮『東西洋考』萬曆四十六年（一六一八）序（謝方点校『東

西洋考』北京 中華書局 一九八一年）

茅元儀『武備志』卷二四〇「鄭和航海圖」天啓元年（一六二二）

自序（向達整理『鄭和航海圖』北京 中華書局 一九六一年）

茅瑞徵『皇明象胥錄』崇禎二年（一六二九）序

何喬遠『名山藏』崇禎十三年（一六四〇）序

『朝鮮王朝實錄』韓國國史編纂委員會 一九五五—五八年（太

白山史庫本）

日本史料集成編纂会編『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成 李朝実録之部』（国書刊行会 昭和五十一年以後 既刊 十一冊）

『訓読吏文 附吏文輯覧』国書刊行会 昭和五十年（『訓読吏文』）

向象賢『中山世鑑』順治七年（一六五〇） 琉球史料叢書五

井上書房復刻版 一九六二年（『世鑑』）

蔡鐸『中山世譜』康熙四十年（一七〇一） 沖縄県教育委員会

『蔡鐸本中山世譜』一九七三年（『蔡鐸本世譜』）

蔡温『中山世譜』雍正三年（一七二五） 琉球史料叢書四（『蔡

温本世譜』）

鄭秉哲『球陽』乾隆十年（一七四五） 球陽研究会編『球陽・

原文編』角川書店 一九七四年

『琉球国由来記』康熙五十二年（一七一三） 琉球史料叢書一

・二（『由来記』）

『琉球国旧記』雍正九年（一七三二） 琉球史料叢書三（『旧記』）

『那覇市史 資料篇第一卷五・六・七・八 家譜資料（一）

（二）（三）（四）』一九七六年—八三年（『家譜（一）（二）

（三）（四）』）